

明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第201回

【学生の目】

浦安の市街地を歩いていると、目にするのが少なくなってきた伝統的な日本家屋を見つけた。立派な松の木が玄関の位置を示している。下見板張りの外壁と銅製の雨樋

(あまごい)がレトロな木造家屋だ。平側と妻側に付けられて重厚な印象を与える入母屋の屋根、下見板の水

伝統家屋の魅力

職人の技量の高さが建築に芸術性を持たせることを示している。最近ではコストダウンを追求し、デザイン性を犠牲にしても安く仕上げる住宅も少なくない。そのような住宅街の一角に、優れた造形美をもつ伝統的な住宅があり、使い続けられていることに二重の魅力を感じる。

第一の魅力は、美しい建築そのものだ。今は使われることが少ない材料でつくりだす魅力を整理すると、まず屋根瓦だ。瓦は重いために建物の耐震性確保にマイナスであり、軽い材料を見慣れた若者にはアンバランスに見える。これに対して勾配を緩やかにする、庇(ひさし)の出を短くすることで重い感じを抑えている。同じ作法で屋根全体が作られ、一体感があることもポイントだ。

職人技量で建築に芸術性

次に杉板だ。近年は樹脂系、金属系、タイルなどで耐火性や耐久性を確保する。伝統的な板張りには耐火性が優れているとはいえないが、表情豊かにデザインできる点が優れている。

そして銅板だ。近年多く採用される樹脂製の雨樋は、施工性は優れるが劣化が早く、みずぼらしくなりやすい。銅板は錆の緑青が発生するが、その緑青が銅板を守る。鮮やかな色の錆が劣化を防ぐ不思議な関係が面白い。

第二の魅力は、美しい建築を維持しつづける所有者の存在だ。建物は建築した時から劣化が始まり、補修工事など細かな手入れが必要となる。しかし、古い様式の建物は補修工事をしようとしても材料や労務費が高く、手配も容易でない。そのため元通りの修復を断念し、コストを抑えられる樹脂製や金属製の外装に変えてしまうことも少なくない。

写真の住宅も写っていない面はトタンで壁を覆っていて少し残念だ。伝統家屋の修繕工事が減少すると、技術を持った職人の減少につながり、伝統の承継が途切れる。困難な状況にもかかわらず、日本家屋を維持し続けようとしている所有者を応援したい。

【教員のコメント】

屋根のかけ方で設計者の技量がわかる。平面計画が稚拙で破綻している建物で美しい形状の屋根は期待できない。平面計画は成立していても形状を構築する力がないと外壁と屋根が一体化しない。勾配に制約がある伝統建築では一層明白となる。



武田 亜輝士
不動産学部3年



伝統家屋には魅力がたくさんあるが...